「和泉式部日記」の構成

――第三者的描写の考察から――

笹井伊久子

・はじめに

「和泉式部日記」の叙述面での特色に、『第三者的描写』がある。すなわち、

(1) 主人公が直接体験し得ないはずの事柄を、推量や伝聞の形ではなく、第三者の観点から客観的に描いている。

(2) 主人公を、第三人称で書いている。

ということである。

これは今まで、作者は誰かという角度から問題にされてきた。が、ここで、さらに別の角度から、考えてみたいと思う。

宮ひさしうもなりぬるかなとおぼして、御文つかはすに、わらは、「一日まかりてさぶらひしかば、いし山になんのこのごろおはしますなる」と申さすれば、「さは、けふはくれぬ。つとめてまかれ」とて御ふみかかせ給ひて給はせて、いし山にゆきたれば、「佛の御まへにはあらで、ふるさとのみ戀し

くて、かゝるありきも、ひきかへたる身のありさまと思ふに、いとものがなしうて、まめやかに佛を念じたてまつるほどに、高欄のしものかたに人けはひのすれば、あやしくてみおろしたれば、このわらはなり。

（岩波文庫本　P 38）

ここでは、前半、式部には見えないはずの情景が、第三者の視点から描写されている。それが、いつしか「いとものがなしうて」と一人称的な心情の吐露となり、主人公の視点で落着いている。

このような、第三者的描写の一貫を妨げる視点の変化は、どこから現れたのであろうか。この点から、考えを進めてみたい。

第一章　移りゆく心情

まず、和泉式部の心情に、目をとめてみた。

からうじておはしまして、……（略）……「いざたまへ、こよひばかり。人もみぬ所あり。心のどかにものなどもきこえん」とて車をさしよせてたゞのせにのせ給へば、我にもあらでのりぬ。人もこそきけと思ふ〳〵いけば、いたうよふけにければしる人もなし。やをら人もなきうにさしよせて、おりさせ給ひぬ。「月もいとあかければ、おりね」とし ひてのたまへば、あさましきやうにておりぬ。「さりや、人もなき所ぞかし。いまよりはかやうにてをきこえん。人などのあるをりにやと思へば、つゝましう」などものがたりあはれにし給ひて、あけぬればくるまよせてのせ給ひて、「御おくりにもまゐるべけれど、あかくなりぬべければ、ほかにありと人のみんもあいなくなん」ととゞまらせ給ひぬ。女みちすがら、あやしのありきや、人いかにおもはむと思ふ。あけぼのの御すがたのなべてならずみえつるも、おもひいでられて、

よひごとにかへしはすともいかでなほ
あかつきおきを君にせさせじ

くるしかりけり」とあれば、

あさ露のおくる思ひにくらぶれば
たゞにかへらんよひはまされり

さらにかゝることはきかじ。よさりはかたふたがりたり。御むかへにまゐらん」とあり。

（同　P 25～P 27）

ここには、式部の心情の推移がみられる。

「車をさしよせてたゞのせにのせ給」う宮の一方的な行動に押し流されて、「我にもあらで」乗ってしまった自分を、式部は耐え難いものに思ったのであろう。その耐え難さに、「人もこそきけ」と、容赦もなく自分をつき離してしまう。「月もいとあかければ、おりね」と「しひて」おっしゃる宮のおことばに式部は「あさましきやうにて」車から降りる。「あさまし」には、一方的で性急な宮の行動への非難の気持と共に、それを非難しながらも言いなりになってしまう自分への、自嘲の気持さえこめられている。明け方の途すがら、我が身を客観すればする程に、こんな「あやしのありき」を「人いかにおもはむ」……と、他人への思惑に胸は痛み、我が身を責めずにはおれないのである。

ところが、これほどに自身を客観し得ていたはずの式部でありながら、宮の「あけぼのの御すがたのなべてならずみえ」たことを思い浮かべると、ふと、歌を書きおくる。

『宵ごとに宮様をおかえししてでも、やはり、暁起きをさせたくはございません。暁のお別れは苦しゅうございました。』

「くるしかりけり」では、すでに他人への

思惑を考えるなどという客観の余裕は消え、そこにあるのは、たゞたゞ宮との恋の成就を希う、せつない女心のたゆたいの実感だけである。

宮をも式部自身をも冷静にみつめ得ていた心情が、ふとした契機に、一切を忘れて主情の世界に埋もれてゆく——。

第三者的描写の一貫を妨げる視点の変化の原因は、こうして、和泉式部自身の移ろいやすい「心情の揺れ」の反映、とみることはできないであろうか。

第二章　「構成」ににじむ心情推移

次に、日記の主人公としての式部の目を通して描かれていない所を第三者的描写の部分と呼んで、それが作品全体にどうあらわれているか、を検討してみた。

なにが第三者的描写の対象となっているかに注目すると、そこから自ずと、作品の切れ目がみえてくる。

Ⅰ（P59～P82 L6）南院入りまで

（Ⅰ）（P9～P58）恋のはじまり　あはれなる一夜

（A）（P9～P49 L2）

（B）（P49 L3～P58）

Ⅱ（P82 L6～P88）南院のさわぎ

すなわち、Ⅰでは、式部には見えない宮の行動が、第三者的描写の主な対象となっている。そしてその描写は、すべて、二行以上にわたる長いものである。

Ⅱではそれと対照的に、すべて宮の心情が対象となっている。その描写も、Ⅰとは比較はならないほど短かい。

Ⅲでは、宮と式部をとりまく周囲の様子が対象となっている。文庫本で六ページ足らずのこの部分の、ほとんどが、第三者的描写である。

ところで、(B)は、『たまくらの袖』ということばを愛の證として、二人の心がいよいよ結ばれてゆく部分である。(B)を経て第三者的描写の対象と方法が変化してゆくことに、意味は無いものであろうか、と考えてみた。

はじめ、宮を自分に対する者、我が身の外にあって自分を規制する存在、と考えている間は、式部にとって、宮を第三者の立場から客観者にみつめることは、大切であったと思われる。

客観 ― ふとした契機 → 主情の世界（つれづれなぐさむ）

たまくらの袖 → （真実の愛）

客観 ― 主情 → （安定）

ところが、『たまくらの袖』に愛の證を得てからは、式部は、もはや式部一人ではあり得なくなる。我が身のうちに宮をみつめ、宮の心を我が心と感じた式部には、もう宮の行動をみつめる必要もなくなってくる。

こう考えてくると、この作品の「構成」に

も、先にみた、客観の世界から主情の世界へと、ふとした契機で移ってゆく式部の心情がそのまゝに映し出されている、と言ってもよいのではないかと思われる。

・まとめ

「和泉式部日記」にみられる第三者的描写は、今まで、作者の問題に結び合わせて考えられてきた。が、第三者の視点から書き起された筆が、いつか一人称的な心情を吐露し、主人公の視点で落着く、という一文に接した時、さらに別の角度から第三者的描写を考えてみたい、と思った。

第三者的描写の一貫を妨げる視点の変化の原因は、客観の世界に安らぎ得ず、主情の世界に高まり埋もれてはじめて安定する、という式部自身の移ろいやすい心情にあった。それは、この作品の「構成」にも反映している。

宮との愛の記念として、式部は「作品」に思い出を托そうとした。「作品」という意識は、甦える思い出を第三者的描写の対象にするだけの余裕を与えた。ところが、ふと『たまくらの袖』の思い出に過ぎし日へと誘われた式部は、湧き上がる想いの中に身を委ねてしまう。その結果、宮を我が身の外にみつめることで可能だった第三者的描写は、消えてゆく。

こうして、「和泉式部日記」の構成は、式部の心のあり様そのものから生まれてきた。それは又、「和泉式部日記」が式部の心の世界そのものである、ということでもある。

（本学四年）